

京都教区時報

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

2頁 三重北勢ブロック 聖書ウォークラリー

3頁 聖書講座「マタイ福音書」絹川久子氏

発行 京都司教区
責任者 村上透磨
京都市中京区河原町
三条上ル
京都教区時報編集室
TEL 075-211-3468
FAX 075-211-4345

点訳版「京都教区時報」(無料)
ご希望の方は点訳ネット「レジナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さんまでお申込みください。
TEL・FAX 0794-31-8601



マリアと共に祈りましょう

ああ無欲にこれほど小さくなられた神の御子イエス・キリスト。マリア様にとって聖体は格別ながありました。この碎かれたパンと血は、御自分の御子と共に分かち合われた、その「御体といのち」でもあったからです。

マリア様と「共に」とは、「よう」「という意味なのか、マリア様の「心を心として」、あるいはマリア様の「観想をもつて」といふのでしょうか。

マリア様の日常は、御子と観想(心に留め)すること。御子を通して示された神のみ旨を求め、生きることであり、御子の側にいつも生きているということでありました。地上の全生涯だけでなく、天上の生涯、これがマリア様の日常となりました。マリア様は女王である以上に「母」であり、その生活の非凡さは、平凡に生きぬくことありました(リジーのテレジア)。私たちの願う平和は、復活の賜物としての平和です。御子は平和そのものであり、マリアはその神の御子としてのキリストを私たちの日常生活に生み出されたのです。

(村上透磨)

12
2005

聖書ウォークラリー

三重北勢ブロツク

1. 親睦会の趣旨

1. 親睦会の趣旨

らいが落ちで、信仰上の問題や、共同宣教司牧を如何に進めるかななどという話題には適さないと思われます。

そこで、鈴鹿教会が頭を絞って考えた名案（迷案？）は、天下に名高い鈴鹿サー・キットに隣接する「青少年の森」に会して、美しい大自然の中で、神と人と小鳥たちと共に語り合おうということになりました。

2. 行事の計画と実施

うという意見が出て、その意見を出した鈴鹿教会が案を練ることになりました。

第1部 野外ミサ（午前10時から）

第2部 ウォークラリー（昼食を挟んで）

レクリエーションはアーリービンの人たちが、民俗舞踊と歌を披露してくれた。パンプーダンスに足

12個のダンボールには残ったパンが多くて始末に困ったほど)。

第3部 レクリエーション（午後 3時ごろまでに終る）

になるだろうか。持っていたハンケチをイエスに差し出すと全員が満腹になったことを思い起こすことができた。

いたたけるというケーブルであつた。本当にいろいろな人と話ができる、楽しかった。共同宣教司牧にきつ

あるが、その趣旨は非常に高尚なものであった。12グループはイスラエルの12部族であり、池の周囲はエジプトから始まって約束の地にいたる出エジプトの全行程を意味した。紅海や荒れ野、シナイ山

しつつ語り合い、コミュニケーションを忘れないかった。
（鈴鹿教会 富永正行）

奉獻は村上透磨神父様（実は詩人？）のアイデアで、当日みなが食べる各自の弁当（おにぎりやせ

や水で争ったマッサなど8つのポイントを通過し、そこに用意された質問にも答えなければならなかつ

聖書講座シリーズ「マタイ福音書を読む」9／7・8

神の国を生かす信仰（第一の受難予告）

絹川久子氏（国際キリスト教大学）



「しかしあ

なたたちは、
私を誰だと言
うか」。イエ
スの問いかけ

は、現在生きている私たちに対する
問い合わせでもある。

今年の後半の最初の講座として、
16章13節からは、これまでのガリ
ラヤでの宣教が終わって、イエス
がエルサレムに向かう始まりとな
る。受難に向かって進むイエスの
緊迫感と、弟子たちの無理解の間
の落差が大きく広がっていく。

冒頭の場面は、フィリポ・カイ
サリア地方に弟子たちと対話する
ために行つたときのことである。

この場所は北の辺境にあって、い
ろいろな宗教、神々、民族が住ん
でいた。ローマ帝国による圧政の
下で虐げられている労働者や農民
がいるその場所でイエスは弟子に
尋ねたのである。

『あなたがた』はわたしを誰だ
と言った。これに対してシモンは
『あなたは「生ける神」の子です』

と答えた。生きて常に働いている

神、そういう神の子という告白で
ある。シモンの答えに満足したイ
エスは、「あなたはペトロ。わた
しはこの岩の上に『わたしの』

『教会』を建てる」と言った。『教
会』というのは、当時のユダヤ教
の人たちが集まる礼拝所（シナゴー
グ）ではなく、エクレシア（呼び
出されたという意味）である。こ
の言葉は市民代表者たちの意見を
まとめる政治的な集まりを意味し
ていたので、イエスは敢えて『わ
たしの』という言葉を使った。こ
れはローマ帝国の権威に沿うもの
ではないという意図が込められて
いた。一部の人が代表する集まり
ではなく、上から下まですべての
人々に開かれた共同体を指示し
ている。

11章5節「目の見えない人は見
え、足の不自由な人は歩き、らい
病を患っている人は清くなり、耳
の聞こえない人は聞こえ、死者は
生き返り、貧しい人は福音を告げ
知られている」という集まりを
求めた。治してくださいとは頼ま
ず、苦しみを共にしてくれる
ことをイエスは死をかけて伝えたか
つた。私たちは今でもそれを受け止
めているのだろうか、深く考へて
みたい。

イエスは考えていた。

そしてイエスは言われた。「わ
たしについて来たい者は、『自分
を捨てて、自分の『十字架を背負つ
て』わたしに従いなさい』。自分
を捨てないというのはローマ帝国

のエクレシアに従うことで自分の
安全、利益を守るために現状維持
にくみするということである。

『自分を捨て』とは当時の権力に
すり寄らない、イエスのエクレシ
アに参与するということである。

十字架刑はローマ市民には適用さ
れない。反抗的な外国人、暴力的
な犯罪者、泥棒、奴隸たちが十字
架刑にかけられた。ローマ帝国の
支配する社会で安穏と生活するの
ではなく抵抗するエクレシアのイ
エスが十字架にかけられたのであ
る。「十字架を背負つて」従うと
いうのは体制にそむくという意味
であり、決断が求められる。

後半の17章14節から、悪霊に苦
しんでいる子どもの父が出てくる。
子どもの苦しみを見て何もしてや
れず長年苦しんだ父は、癒すこと
のできない弟子たちに失望しなが
ら、なおイエスに「あわれみ」を

苦しみの十字架を担おうと覚悟し
たことにもなる。それは死をも意
味したが、しかし死を共にしよう
という中にエクレシアの命がある
ということである。

理解できない弟子たちに、イエ
スは、これから弟子たちが出会う
状況はみんなこんなに絶望的なも
のかもしれない。命ですら、病や

経済的、人種的なさまざまな理由
でコントロール出来ない、そうい
う人たちに出会い、それをどうやっ
て乗り越えるか、それを教えたか
た。イエスの「わたしのエクレシ
ア」を作るとはそういうことであ
る。「あわれみ」の共同体、「共に
苦しみを担う」共同体、「共苦」
の共同体を作ることを弟子たちに
教えたかった。

この物語ではイエスが息子を癒
しているが、現実にはそう簡単に
奇跡は起こらない。新しいビジ
ョンを創ること、「神の国」という
誰でも歓迎される共同体を作るこ
とに意味が出てくる。それはもの
すごいチャレンジである。そのこ
とをイエスは死をかけて伝えたか
つた。私たちは今でもそれを受け止
めているのだろうか、深く考へて
みたい。



感謝をこめて



主のご降誕を迎える

神は来られました。

私たちのひとりとなり、私たちとひとつになるために来られました。人間であるということは、いつも場所と時間の中に存在しているということです。
主を私たちの共同体に迎え入れるのです。

福音センターは、この主の現存を絶えず新たにし、親しい交わりへと導く学びの機会を開くよう取り組んで参りました。みなさまにいろいろな形で参加いただきましたことに感謝いたします。

今年は特に聖体の年を記念し、聖体についての特別講座を設けました。又、日常生活を取り上げイエス・キリストに出会う「基礎講座」や神への親しさへと招き入れる「祈り」コース、教会共同体からの派遣としての「病人訪問、聖体奉仕」コースや異文化理解を深め互いを生かしあうための「滞日外国人とともに」の研修、「カトリック教会の教え」の講演、「結婚講座」等を開くことが出来ました。

こうした学びを通しての主の訪れが私たちに光、教え、癒し、勇気をして命をもたらしますように。

~~~~~ 結婚講座お知らせ ~~~~

第26回 2006年1月21日、2月4日、2月18日（各土曜日）10：30～15：00
会 場 河原町カトリック会館

問い合わせ	〒604-8006	京都市中京区河原町三条上ル	京都カトリック福音センター
Tel	075-229-6800	Fax 075-256-0090	E-mail fukuin@kyoto.catholic.jp



わたしは1997年から2004年の約7年間を看護助手として精神科の病棟に勤務していました。その中で忘れられない一つの体験を証して主の栄光を讃め称えたいと思います。

その頃のわたしの生活は、朝ミサに与り（教会の前が病院でした）その日の力を頂いて勤務していました。帰りはまた聖櫃の前で主に一日の報告をしながら、しばらく過ごし帰宅するという具合でした。病院の中でも主の憐れみの臨在をいつも感じていましたから、とても平安でした。ある日Iさんという方が他病棟から転棟して来られました。

Iさんは以前バリバリ働いていた時期もあったそうですが、途中失明されてからは自暴自棄となり自傷行為を繰り返し、大声で叫び、他の方にもスタッフにも迷惑行為をしつづけていました。それで皆はIさんに対して、最低限度の係わりに留めておこうとしている状況でした。

◆聖靈に促され

そうこうしている内に、Iさんが昏睡状態に陥った時がありました。いつものように掃除のために病室に入りIさんの所に近づいた時、「今ぞ！」という促しを受けたように感じ、主がIさんを御心に留めておられるのが分かりました。とっさにIさんの耳元で聖靈の歌を歌っていました。「今聖い御靈よこのわたしを満たしてください。主の御座から流れこの私を清めてください。御靈に溢れ生きる主の栄光仰いで、御靈に生きる主の栄光仰いで」。すると昏睡状

主の力は奇跡を起こす。わたしたちはときとしてこのことを忘れ、すべてにおいて自分の力に頼ろうとする。しかし人を変えられるのは神しかいない。今回の寄稿はあらためてそれを思いださせてくれる。

石川いつこ（奈良教会）

態のIさんの目から涙が流れ出たのです。わたしの心は躍りました。その場にずっと居たかったのですが仕事中なのでそこに心を残しつつも主に祈りながらその場を離れました。

◆主が触れてくださった！

2日後出勤した時、Iさんは覚醒されました。驚く事に別人のIさんに変わっていました。ベッドに静かに座り顔も優しくニコニコしていました。耳に飛び込んできた第一声は、「キリストは何処の人やろか？」でした。同室のKさんが「キリストはローマの人や」と答え、2人で会話しているのです。

Iさんに近づいた時、「あんたに頼んどけばええんかな」と問い合わせられたので直ぐ「ハイ」と応答しました。主がIさんに触れて癒してくださった事を確信し主に感謝しました。

Iさんは、その後半年ほど、主の平安を頂いて穏やかな日々を過ごされ、主の元に召されました。「キリストはローマの人や」と言っていたKさんも、Iさんの死後半年ほどして主の元に召されました。お2人共、最後のお顔はとても穏やかで微笑んでいるように見えました。主の慈しみによってお2人共苦しみから解放され、今頃は主の御前で歓喜に満ち溢れている事でしょう。

誠に主は救い主、癒し主です。詩編30をもってお2人と共に素晴らしい主の御業を賛美いたします。アーメン。

外登法問題と取り組む 関西キリスト教代表者会議

1980年代、外国人登録法の改定を求める人権獲得闘争として、大勢の在日外国人が指紋押捺を拒否・留保されたことを多くの方が思い出されることでしょう。

その運動の中で1985年、「外登法問題と取り組む関西キリスト教代表者会議」が結成され、今年で20周年を迎え、その記念集会が9月19日(祝)、在日大韓基督教大阪教会で開かれました。

今回の記念集会には、京都教区から大塚司教の代理として、村上眞理雄司教総代理、村上透磨師が参加しました。

この会議にはカトリックから池長潤大司教、大塚喜直司教、神林宏和師。他に在日大韓基督教会西部地方会、在日大韓基督教会関西地方会、日本キリスト教会近畿中会、日本基督教団大阪教区、日本基督教団京都教区、日本基督教団兵庫教区、日本自由メソヂスト教団、日本聖公会大阪教区、日本聖公会京都教区、日本バプテスト同盟関西部会、日本バプテスト連盟関西地方教会連合の方々が加わっています。

この会議によって作り上げたネットワークが、震災の被災者救援、外国人の人権を守る取り組み、自然保護、平和運動などの今日的課題をキリスト教諸教派の協働の取り組みとして実を結んでいます。

ています。

濟州教区の紹介①

交流部 兼元邦浩

濟州島について

歴史

チエジュドと朝鮮半島本土の交渉が何世紀にもわたり途絶えた時期があり、その結果独自の歴史、伝統、服飾、建築、方言などが育まれることになった。

李王朝後期になるとチエジュドは流刑地となり200人を超える知識人や政治犯が流されてきた。

その中には地元の人々に教育をした人々もあり彼等はこの島だけでなく、国を代表する偉大な文化人として尊敬を集めている。

考古学者は4万年前の旧石器時代中期、チエジュドが中国、朝鮮、台湾、日本を含む大陸の一部だったところから既に人類が存在していたとしている。島で発掘された新石器時代の石器や矢じりは、日本の縄文時代のものによく似ている。

また地元の信仰にはシャーマニズム(呪術的宗教)の要素が含まれており今も島の象徴となっているトルハルバン(石像)もそういう宗教的要素が含まれているとも

文化

長年にわたってチエジュドは独特な建築様式を発展させてきた。伝統的な茅葺き屋根の家屋に何世代かが同じ屋根の下に同居しているのは本土と同じだが、台所や暖房システムはそれ別になつてゐるのが、特徴的だ。



トルハルバン

いわれている。

新羅の頃からこの島はタムナ(耽羅)として知られていたが、12世紀初頭には高句麗黃王朝に征服され13世紀に濟州と名づけられた。さらに1276年にこの島にやってきた元の放牧民の影響で馬術の伝統が生まれ、方言も変化した。この島には地元の人々に教育をした人々もあり彼等はこの島だけではなく、国を代表する偉大な文化人として尊敬を集めている。

こうした歴史の中で島の人々は主に農業を営み暮らしてきた。これは本土と同じだが、台所や暖房システムはそれ別になつてゐるのが、特徴的だ。

伝統的な衣装は麻(王族の場合は綿)で作られ柿汁で染められていた。今日でもこうして作られたオレンジ色の衣装が売られている。

お
知
ら
せ

青年センターから

◆中学生冬合宿26日(月)~27日(火)
◆高校生冬合宿27日(火)~28日(水)

教団委員会から

◆聖書委員会▼聖書深読10日(土) 10時 P・オヘル師 河原町会館6階 費用2500円(昼食代を含む) 持参品 聖書・筆記用具・ノート(お申し込みは3日前まで)

贊美式・主日のミサ 第1日曜日
17時半 河原町教会

ブロック・小教区から

◆河原町教会クリスマス旬間行事

▼カトリック聖歌集による歌ミサ

コンサート「斬りと音楽の夕べ」

～パキスタン大地震被災者のため

に、15日(木)19時 ソプラノ独

入陽斜五百四

(収益は全額カリタスジャパンを通じて送金)チケットは受付、3

階事務所、サンパウロ書店▼タリ

教育関係施設から

◆奈良教会▼第12回からし種コンサート24日（土）19時▼クリスマスコンサート24日（土）19時▼クリスマス市民の集い、同日19時半▼深夜ミサ、同日23時半▼降誕ミサ25日（日）7時、10時まで

◆京都女子カルメル会修道院▼講演とミサ4日（日）13時半講演「十字架の聖ヨハネにおける信仰の暗夜」—まことの自由への道—15時ミサ 講師 北村善朗師

◆聖ドミニコ女子修道院▼E・スヒレベーグス著「イエス」を学ぶ13日（火）19時半 指導 原田雅樹師（ドミニコ会）▼「ロザリオと共に祈る会」16日（金）10時半▼どちらも無料、当日どなたでもどうぞ。問合せ075（231）

◆聖母教育文化センター▼月曜書講座5日・19日19時 センター
教室 講師 Sr安藤敬子▼金曜書講座2日・9日9時半 センター
教室 講師 Sr安藤敬子▼いずれも無料▼巡礼旅行ベルナデッタを訪ねて『聖母御出現の日』をルルドで2月10日(金)～15日(水)問合せ075(643)2320

◆JOC▼働いている青年の集い。

集会場所 京都僧ぐの家の家（丹波
教会前）、滋賀働く人の家（大津

教全裏 選編卷之三

◆おでんとやさんの会（心が傷ついていたり、うつ病の方のための場）

いまで、ホンダの方もどうぞ)▼例会第3金曜日13時 西院

◆力トリック聴覚障害者の会京都
教會

会16日(金)11時 河原町会館

会4日(日)13時半 河原町会館

◆京都力トリック混声合唱団▼練

れも14時 河原町会館6階

◆京都キリストン研究会▼懇親会

◆コーゴチエレステ▼練習日第2、4木曜日 河原町会館6階
◆在世フランシスコ会京都兄弟会
▼集会17日（土）13時半 フラン
シスコの家
◆聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ
会▼河原町協議会11日（日）河原
町教会
◆二金会▼9日（金）西陣教会
◆糠みその会（人権・環境等につ
いて、勉強会・現地見学等を行っ
ています。老若男女不問）▼8日
(木) 19時半 九条教会ホール
◆レジオ・マリエ▼4日（日）河
原町会館6階
◆心のともしひ 12月番組案内
▼テレビ KBS京都テレビ
△25日の放送内容△
東京教区の幸田和生補佐司教の話
幸田司教様が紋章に降誕の場面を
選ばれたのは？様々なエピソード
を織りませて、現実の中に独り子
イエスが来てくださっていること
を味わうよう勧めてくださいます。
▼ラジオ KBS京都ラジオ
12月のテーマ「キリスト様の誕生」
問合せ075（211）93341
◆「一万匹の蟻」運動基金報告
累計 45、321、773円
(10月18日現在)

大塚司教の

12月のスケジュール

- 1日 (木) 中央協常任司教委員会
司教社会問題研究会
2日 (金) 司教社会問題研究会
3日 (土) 第4回教区宣教司牧評議会 14時
滋賀地区ラテンアメリカ共同体堅信式ミサ (彦根) 14時
7日 (水) ~8日 (木) 東京カトリック神学院常任司教委員会
10日 (土) 共同宣教司牧推進チーム会議 10時半
12日 (月) ~14日 (水) 特別臨時司教総会
15日 (木) 司教顧問会・責任役員会 10時
20日 (火) 共同宣教司牧推進チーム事務局会議 14時
24日 (土) 河原町市民クリスマス 19時半
主の降誕深夜ミサ 23時半
25日 (日) 主の降誕ミサ (河原町) 10時

◆帰天
マルセル・カリエ師
(レデンプトール修道会)
10月16日帰天されました。
京都北部地区をはじめ、
京都教区のためにいろいろご奉仕して下さいました。永遠の安息のためにお祈りください。



75歳でした。
京都北部地区をはじめ、
京都教区のためにいろいろご奉仕して下さいました。永遠の安息のためにお祈りください。

◆お詫びと訂正
▼336号(11月号)3ページ下段左の写真に「講演会の後の交流会」という説明がありますが、これは「6月奈良で行われたファミリーデーでのオチャシテ・ロサさんを含むベルーの方々の演奏風景」でした。お詫びして訂正いたしました。

◆編集部から
お知らせに載せたい情報は、前月の1日までに、教区時報担当宛にFAX 075(211)4345か、henshu@kyoto.catholic.jpに、発信者のお名前を明記してお送りください。

青年の集い「YES2005」

西田周輔郎

さる10月1日~2日に、青年

センター主催で京都教区青年の

セントラル主催で京都教区青年の
「YES2005」が行われました。今日は予定通りびわ湖の北部の湖畔の公共宿泊施設

を利用して、1泊2日の合宿形式でとても楽しい集いとなりました。昼過ぎに集合して、お互いに自己紹介をしたあと、2チームに分けてキックベースをしました。予想外に試合は盛り上がり、みんないい汗がかけました。

休憩のあと、今度は雰囲気を変えてみんなでホスピタリティでの手つきでかなり苦労しました。種無しパンを捏ね上げるのは予想以上に難しく、慣れない手つきでかなり苦労しましたが、なんとかきれいに焼き上げることができました。そしてその晩のミサでみんなで作ったホスピタリティでお捧げました。拝領でいただいたそのホスピタリティは予想よりも少し堅くてみんな苦笑していました。そしてその夜は青年活動について深い話し合をして、ここでこれからこの決まりました。2日目は参加者みんなにメッセージをお互いに書きあうサイン帳というものをしました。これは中学生会ではおなじみのイベントでしたが、あえて青年のイベントでや

てもらうという意見も出ているので、何かこんなイベントがあるという情報をお持ちの方はぜひ青年センターの方までご連絡ください。今回のYES2005の参加者は比較的少なかったのですが、その分お互いに深いつながりができたように思えます。企画、運営をした立場としても、とても満足のできるものとなりました。来年もYESは行われる予定です。ぜひ来年は皆さんお越しになってみてはいかがですか。

青年センターあんてな

お知らせに載せたい情報は、前月の1日までに、教区時報担当宛にFAX 075(211)4345か、henshu@kyoto.catholic.jpに、発信者のお名前を明記してお送りください。

携帯電話からもご覧になります
<http://www.kyoto.catholic.jp/seinen/m>